<table>
<thead>
<tr>
<th>Title</th>
<th>近代日本の都市庶民金融：学生利用の実態とオーラル・ヒストリーからの検討</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Sub Title</td>
<td>Finance for common people in modern Japan : focusing on fact of student's use and oral history</td>
</tr>
<tr>
<td>Author</td>
<td>三科, 仁伸(Mishina, Masanobu)</td>
</tr>
<tr>
<td>Publisher</td>
<td>慶應義塾福沢研究センター</td>
</tr>
<tr>
<td>Publication year</td>
<td>2016</td>
</tr>
<tr>
<td>Abstract</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Notes</td>
<td>研究ノート 拵図</td>
</tr>
<tr>
<td>Genre</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
</tbody>
</table>
会見後に「田中・総理」を務める。
日本資本主義の構造的ラ環として、質屋金融の位置づけを課題とし、消費者過程を資本主義の発展段階との関連から捉えることを課題としている。筆者は、こうした理論的枠組みで質屋金融関係者の生活を評価するため、専門的質入行動の分析を行った。重田三枝『質物取引』の分析により、質入行動の具体性を踏まえるために、多田質店を対象とした質入行動の分析を行う必要があると考える。

写真1 太田屋多田質店建物

典拠）『東京新聞』1972年3月29日。
後方に見えるのは、慶應義塾大学旧図書館の建物。
太田屋多田質店の営業実態

それでは、本稿で検討事例として扱う多田質店の営業実態を、先行研究の成果を踏まえて確認しておく。ここでは、表1として、区の質屋概況を示し、図1として、多田質店の貸付口数を示す。次節を検討時期として設定する一九三五年度の多田質店の貸付口数は八三五四口、総貸付金額は九万六六八八円七三銭であることから、当時の質屋規模の大きさであったことがわかる。図1が示すように、多田質店の貸付口数は、一九三〇年代前半まででは、区の一店当たりの平均を回っていたが、これ以降は逆転している。そして、この時期から多田質店は、他の質屋と比較して貸付口数は減少傾向に転じている。一九三〇年代には、資金の効率性の低下による質屋経営悪化が発生しており、これにより区の一店当たりの平均も減少傾向にあったと考えられる。
表1 芝区の賃屋概況

| 年次 | 賃屋数 | 新規貸付 | 1店平均貸付 | 1口平均
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th>口数（口）</th>
<th>金額（円）</th>
<th>口数（口）</th>
<th>金額（円）</th>
<th>貸付金額</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1914年</td>
<td>102</td>
<td>591,635</td>
<td>1,476,707</td>
<td>5,800</td>
<td>14,478</td>
<td>2.50</td>
</tr>
<tr>
<td>1915年</td>
<td>107</td>
<td>600,543</td>
<td>1,361,684</td>
<td>5,613</td>
<td>12,726</td>
<td>2.27</td>
</tr>
<tr>
<td>1916年</td>
<td>109</td>
<td>564,140</td>
<td>1,505,372</td>
<td>5,176</td>
<td>13,811</td>
<td>2.67</td>
</tr>
<tr>
<td>1917年</td>
<td>112</td>
<td>577,802</td>
<td>1,740,801</td>
<td>5,159</td>
<td>15,543</td>
<td>3.01</td>
</tr>
<tr>
<td>1918年</td>
<td>112</td>
<td>572,937</td>
<td>2,272,418</td>
<td>5,116</td>
<td>20,289</td>
<td>3.97</td>
</tr>
<tr>
<td>1919年</td>
<td>98</td>
<td>529,552</td>
<td>2,800,653</td>
<td>5,404</td>
<td>28,578</td>
<td>5.29</td>
</tr>
<tr>
<td>1920年</td>
<td>94</td>
<td>432,278</td>
<td>3,269,706</td>
<td>4,599</td>
<td>34,784</td>
<td>7.56</td>
</tr>
<tr>
<td>1921年</td>
<td>68</td>
<td>334,190</td>
<td>2,700,080</td>
<td>4,915</td>
<td>39,707</td>
<td>8.08</td>
</tr>
<tr>
<td>1922年</td>
<td>86</td>
<td>392,830</td>
<td>3,652,667</td>
<td>4,568</td>
<td>42,473</td>
<td>9.30</td>
</tr>
<tr>
<td>1923年</td>
<td>40</td>
<td>165,390</td>
<td>1,487,373</td>
<td>4,135</td>
<td>37,184</td>
<td>8.99</td>
</tr>
<tr>
<td>1924年</td>
<td>44</td>
<td>186,609</td>
<td>1,823,318</td>
<td>4,241</td>
<td>41,439</td>
<td>9.77</td>
</tr>
<tr>
<td>1925年</td>
<td>45</td>
<td>284,561</td>
<td>2,466,402</td>
<td>6,324</td>
<td>54,809</td>
<td>8.67</td>
</tr>
<tr>
<td>1926年</td>
<td>44</td>
<td>226,121</td>
<td>1,833,029</td>
<td>5,139</td>
<td>41,660</td>
<td>8.11</td>
</tr>
<tr>
<td>1927年</td>
<td>43</td>
<td>236,674</td>
<td>1,821,410</td>
<td>5,504</td>
<td>42,358</td>
<td>7.70</td>
</tr>
<tr>
<td>1928年</td>
<td>42</td>
<td>226,002</td>
<td>1,969,947</td>
<td>5,318</td>
<td>46,904</td>
<td>8.72</td>
</tr>
<tr>
<td>1929年</td>
<td>52</td>
<td>275,261</td>
<td>2,291,481</td>
<td>5,293</td>
<td>44,067</td>
<td>8.32</td>
</tr>
<tr>
<td>1930年</td>
<td>54</td>
<td>274,373</td>
<td>2,030,739</td>
<td>5,081</td>
<td>37,606</td>
<td>7.40</td>
</tr>
<tr>
<td>1931年</td>
<td>53</td>
<td>260,646</td>
<td>1,716,141</td>
<td>4,918</td>
<td>32,380</td>
<td>6.58</td>
</tr>
<tr>
<td>1932年</td>
<td>55</td>
<td>285,926</td>
<td>1,756,184</td>
<td>5,199</td>
<td>31,931</td>
<td>6.14</td>
</tr>
<tr>
<td>1933年</td>
<td>55</td>
<td>317,722</td>
<td>2,016,254</td>
<td>5,777</td>
<td>36,659</td>
<td>6.35</td>
</tr>
<tr>
<td>1934年</td>
<td>54</td>
<td>328,709</td>
<td>2,051,185</td>
<td>6,087</td>
<td>37,985</td>
<td>6.24</td>
</tr>
<tr>
<td>1935年</td>
<td>52</td>
<td>348,417</td>
<td>2,119,888</td>
<td>6,700</td>
<td>40,767</td>
<td>6.08</td>
</tr>
<tr>
<td>1936年</td>
<td>54</td>
<td>355,295</td>
<td>2,125,353</td>
<td>6,580</td>
<td>39,358</td>
<td>5.98</td>
</tr>
<tr>
<td>1937年</td>
<td>51</td>
<td>346,955</td>
<td>2,164,721</td>
<td>6,803</td>
<td>42,446</td>
<td>6.24</td>
</tr>
<tr>
<td>1938年</td>
<td>51</td>
<td>342,278</td>
<td>2,298,346</td>
<td>6,711</td>
<td>45,066</td>
<td>6.71</td>
</tr>
<tr>
<td>1939年</td>
<td>49</td>
<td>304,474</td>
<td>2,416,418</td>
<td>6,214</td>
<td>49,315</td>
<td>7.94</td>
</tr>
<tr>
<td>1940年</td>
<td>51</td>
<td>277,144</td>
<td>2,804,507</td>
<td>5,434</td>
<td>54,990</td>
<td>10.12</td>
</tr>
</tbody>
</table>

典拠）東京市役所編纂発行「東京市統計年表」，各年より作成。

注）賃屋数は，年末現在のもの。
図1 多田質店貸付口数

（口数）
12000
10000
8000
6000
4000
2000
0
1914年
1916年
1918年
1920年
1922年
1924年
1926年
1928年
1930年
1932年
1934年
1936年
1938年
1940年
1942年
1944年
多田質店
芝区一店平均

典拠：多田質店「質物台帳」。各年：東京都役所編纂兼発行『東京都統計年表』、各年より作成。

註1）各年の貸付け口数は「質物台帳」記載の最終取引番号による。

註2）多田質店取引口数の1923年に関しては、史料欠落のため、不明。

こうした全体的な傾向を踏まえて、多田質店資料の内、「人名簿」等に記載された利用者の職業や居住、新規登録時期の検討を行った加治屋新規登録が突出していることを明らかにした。その一方で、各年の取引人数は職工が最多多いことが分かった。そこで、一方で、多田質店取引の特質を見出し、三ヶ年を対象として、質物台帳の分析を行った重田・三科。前掲論文は、衣類の質物利用が支配的であることを指摘した上で、徐々に洋装の質入れが行われるようになる過程を明らかにした。また、書籍の質入れが多くみられる要因として、学生による質入れ行動を指摘した。

そこで、多田質店の基本的な営業活動について
触れておく。多田質店の『質物台帳』の冒頭部分には、次のように記されている。

六、質物流期四ヶ月之事
    但し、物品ノ性質ニ依リ、質入主ト協議之上、別段之約束ヲ以テ此期限ヲ伸縮スルヲ得べし

鼠害害発微生変色等ハ、旧慣ニヨリ、質入主ノ損毛トス

・、利子割合
    貸金貯拾五銭以下ハ
    一ケ月 金一銭
    同金壹円以下ハ 一ケ月 百分ノ四
    同金五円以下ハ 一ケ月 百分ノ三
    同金拾円以下ハ 一ケ月 百分ノ二半

ここに記されているように、流質期間は四ヶ月と設定されており、これは東京市内の質屋の衣服に関する一般的規定と同一である。また、物品が消失若しくは紛失した場合には、貸付金が返済されないことから、質屋の保管は質屋にとって重要な事案であったといえる。利息に関しては、質屋取締法第九条の規定によるもので、これを年利換算すると、三〇パーセントから四八パーセントになる。
図3 N・Y貯入行動（1925年1月－1925年8月貯入分）

<table>
<thead>
<tr>
<th>1925年</th>
<th>1月</th>
<th>2月</th>
<th>3月</th>
<th>4月</th>
<th>5月</th>
<th>6月</th>
<th>7月</th>
<th>8月</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>26</td>
<td>27</td>
<td>28</td>
<td>29</td>
<td>30</td>
<td>31</td>
<td>32</td>
<td>33</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>34</td>
<td>35</td>
<td>36</td>
<td>37</td>
<td>38</td>
<td>39</td>
<td>40</td>
<td>41</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>42</td>
<td>43</td>
<td>44</td>
<td>45</td>
<td>46</td>
<td>47</td>
<td>48</td>
<td>49</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>50</td>
<td>51</td>
<td>52</td>
<td>53</td>
<td>54</td>
<td>55</td>
<td>56</td>
<td>57</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>58</td>
<td>59</td>
<td>60</td>
<td>61</td>
<td>62</td>
<td>63</td>
<td>64</td>
<td>65</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>66</td>
<td>67</td>
<td>68</td>
<td>69</td>
<td>70</td>
<td>71</td>
<td>72</td>
<td>73</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>74</td>
<td>75</td>
<td>76</td>
<td>77</td>
<td>78</td>
<td>79</td>
<td>80</td>
<td>81</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>82</td>
<td>83</td>
<td>84</td>
<td>85</td>
<td>86</td>
<td>87</td>
<td>88</td>
<td>89</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>90</td>
<td>91</td>
<td>92</td>
<td>93</td>
<td>94</td>
<td>95</td>
<td>96</td>
<td>97</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>98</td>
<td>99</td>
<td>100</td>
<td>101</td>
<td>102</td>
<td>103</td>
<td>104</td>
<td>105</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>106</td>
<td>107</td>
<td>108</td>
<td>109</td>
<td>110</td>
<td>111</td>
<td>112</td>
<td>113</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>114</td>
<td>115</td>
<td>116</td>
<td>117</td>
<td>118</td>
<td>119</td>
<td>120</td>
<td>121</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>122</td>
<td>123</td>
<td>124</td>
<td>125</td>
<td>126</td>
<td>127</td>
<td>128</td>
<td>129</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（一）N・Yの場合

N・Y（北豊島郡滝野川居住）は、E・Yと同様、当該期間中学生であるが、一九二四年一月三日に利用登録を行っているため、当該期間には書籍を二月から二月まで多田質店に貯入していたといえよう。尚、E・Yは、一九三〇年の登録情報によると、日本橋区本銀町に居住する小間物商となっていることから、慶應義塾卒業後も継続的に多田質店を利用していたといえる。

（二）N・Yの場合は

N・Y（北豊島郡滝野川居住）は、E・Yと同様、当該期間中学生であるが、一九二四年一月三日に利用登録を行っているため、当該期間には新規の利用案のあるとみなすことができる。図3として、一九二四年九月から一九二五年八月に至る彼の貯入行動を示す。N・Yの場合、当該期間内、初めの貯入が一月二日のもの（番号…一一）であるため、一九二四年二月以前のは割愛した。図3によると、当該期間の貯入口数確認できる。これは、先述の教科書や文学全集類二冊を質物として、三四円を借りたものであるが、受取すと同時に、更に五冊の書籍を加え、再び質入（番号…二五）を行っている。同様の質物を繰り返し利用する過程で、同額の貸付金に対する質物が一定ではないことから、貸付金は取引ごとに変動していたことがわかる。これらの一連の取引を通じて、E・Yは全集などを用いていたといえる。


caption：図2に同じ。

注1・2）図2に同じ。
は三口で、貸付金額の合計は二万八千円である。即ち、一口平均は二万一千円となる。この内、七口（一)
円五円八○円）が受取られた一方で、六口（一円五円五円）が流質となっている。
大要、或は、妻法講話」といった教科書や、啓蒙やオーバーといった衣類であり、これはE・Yと同様の傾向を示している。

図3から、受取人若しくは流質となるまでの期間をみると、最長でも五ヶ月であることから、E・Yなどに
比して短期であることがわかる。これは、N・Yが新規の利用客であるためと考えられる。つまり、多田質店
では継続的な利用客に対して、質置き期間の長期化を行っていたのである。

（三）K・Iの場合

K・I（芝区三田居住）は、一九一八年一月五日に学生として利用を始めた人物である。

恒常的に多田質店を利用し続けた人物である。

図4によると、当該時期の質入り口数は一五一口で、貸付金額の合計は七八三円八○円
である。即ち、一口平均は五円一九円となる。この内、九三口（四四円）が受取された一方、五一口（二
円八〇円）が流質となっている。ここで徴収されては、羽織や絹、赤絹といった衣類で写真機である。

キズ・Iが質物として利用したものは、背広やオーバー、絹、羽紡といった衣類や書籍類である。書籍は、
民事訴訟法 | 刑事訴訟法 | 保険法
といった教科書として利用されたもの（番号…二）や、ア、ノアや、油絵独歩記、立体派未来派表現」といった美術に関するもの（番号…九四）など多岐に亘る
日常生活上の必要性が低いためであろう。また、「二二四年一月五日に質入れされた扇風機（番号…二八）の場合、保管料としての利息は、先述の規定に基づき計算すると一円二〇銭となり、質入れ期間内での実質的
な利率は二〇パーセントである。
図4から、K・Iの質入れ期間をみると、同月内に受戻しているものがある一方で、十ヶ月以上利払いの無いもの、及び長期に亘る質入れが多い場合は、複数の取引を取り扱う。これまでは、実質期限を指定することにより、K・Iの取引期間を減らすことにより、質入れの利息を減じることが可能である。また、一九二七年五月に質入れされた扇風機（番号…二八）の月で上旬、中旬、下旬のすべての期間に質入れをしていることがわかる。このことから、K・Iは多
田質店からの借入れに依拠した生活を行っていたと考えられる。図5として、一九二四年九月から一九三五年八月に至る、彼の質入れ行動を示す。図5によりると、当該

M・T（枝区三田居住）は、一九二七年五月一六日に利用登録を行っており、その時点では専売局に勤務していった。
<table>
<thead>
<tr>
<th>Column 1</th>
<th>Column 2</th>
<th>Column 3</th>
<th>...</th>
<th>Column N</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Row 1</td>
<td>Row 2</td>
<td>Row 3</td>
<td>...</td>
<td>Row N</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(Continued...)

图 4 K · L 频率分配 (1924 年 9 月 - 1925 年 8 月 频率分析)
表2 取引口数及び質置期間分布状況

<table>
<thead>
<tr>
<th>受戸</th>
<th>流質</th>
<th>警察取収</th>
<th>合計</th>
<th>受戸：利払無</th>
<th>流質：利払無</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>利払無</td>
<td>利払有</td>
<td>利払無</td>
<td>利払有</td>
<td>第1四分位数</td>
<td>第3四分位数</td>
</tr>
<tr>
<td>E・Y</td>
<td>25</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>25</td>
</tr>
<tr>
<td>N・Y</td>
<td>7</td>
<td>0</td>
<td>6</td>
<td>0</td>
<td>13</td>
</tr>
<tr>
<td>K・I</td>
<td>86</td>
<td>7</td>
<td>50</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>M・T</td>
<td>48</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>7</td>
<td>0</td>
</tr>
</tbody>
</table>

補足）図2に同じ。
注）質置月数分布状況の質置期間は、利息の算出期間に基づく。なお対象に対する猶予期間が不明なため、月を1回取引の場合は、30日以内であっても、2ヶ月と換算した。
地域の特性上、多くの学生がその利用客となっていたが、彼らは卒業後も多田質店を利用し続けていた。そのため、毎年、多くの学生が新規の利用客とできることが、一定の顧客層を確保し続けられることを意味している。しかし、利用客の側から見た場合、K・IとM・Tの質入れ行動の比較からは、学生時代から利用するこ

とによる特典はないと考えられる。さらに、本稿で取り上げた四名の内、N・Y以外の三名は、一九五五年段階でも、多田質店の利用を継続していたことが確認できる。こうしたことからも解るように、質屋と利用客の関係は、年齢以上に亘って継続し得るものであった。

また、図2・図5に、当日内での受戻しが確認できないことから、生活資金に困窮した利用の事例を出すことは困難である。そのため、ここでは、低利と言いかがよい利息を長期間かつ恒常的に払い続けた上で多田質店を利用していたという実態を重視すべきであろう。即ち、井奥・鎮目、前掲論文が地域社会で果たした質屋の役割として提起した「手元流動性的提供」がなされていたと解することができよう。

三、多田質店関係者に対するオーラル・ヒストリーからの検討

本節では、本稿を含めた一連の多田質店に対する分析を、多田質店関係者に対するオーラル・ヒストリーの成果から再検討していく。ここでの検討に用いるオーラル・ヒストリーは、一九五五年五月二十七日に、井奥成彦（慶應義塾大学教授、杉山伸也（慶應義塾大学名誉教授）、三科仁伸（慶應義塾大学大学院）の三名によるものである。高橋氏は、大正四年の生まれで、戦後に結婚により家を出るまでは、住居を兼ねた多田
近代日本の都市庶民金融

質店内で生活していた。そのため、戦前期の多田質店の実態を経験的に把握しており、聞き取り調査を行う

まず、多田質店の店舗構造と商業動向についてみていく。多田質店の敷地は四三〇平方メートルほどであ

り、ここに三つの土蔵と店舗及び住居があった。三田通りに向かって手前の土蔵が三階建てであり、奥の土蔵

が三階建てであった。また、奥の蔵の床下に砂利が敷いていたもので、安政三年と染めこんだ帳旗があったことか

ら、それ以前のものと考えられている。多田隆之助氏によると、一度、壁面を塗り替えている。土蔵の壁土は三年も

取りかえていった。さらに、新入の使用人は、このあげたての修行からはじまった。また、盗難対策のため、土蔵の

屋根は二層になっており、通風も留意され

の時、倉はピクともせず、あとで左官たちが見学にきたほど、戦災の時はわたしの心がやけどとしてしか

守った18ほど堅固な造りであった。尚、この敷地内に、両替商やた取商売売店も兼営していた。

この二つの蔵の間には、店舗兼住宅があった。客間と厩舎は連続していた。利用客が入居する店舗の入口には

帳がおり、銀行のようなテーブルが置かれていた。利用客が待機した質物の多くは衣類であり、これらは庫の

上に丁寧にたたみ、土蔵の中で保管した。特に高価な衣類は、漆や竹の箱に入れて保管した。こうした丁寧な

275
保管は、シミなどが付着することによる質物の損耗を避けるためのものである。この質物の出し入れは小僧の仕

敷地内には、物置や女中部屋、布団部屋などがあり、住込みの従業員が利用していた。多田質店の従業員

は、平均して、番頭が二人に対して、小僧が四人から五人であった。新規の利用客への対応や彼らの信用調査

中には、ご飯の入ったお金をもってその日の買い物をしたためである。魚店などを経営していた利用客の

や、同棲相手の衣類を無断で質物に入れるものもいたが、多田質店の場合は、こうしたケースは限定的であっ

って、多田質店を倉庫代わりに利用するものもいた。そんな中、質物として預かった衣類は、利用客が着

替えに来るることを想定して、クリーニングに出していた。慶應義塾の学生や銀座の楽団員の中には、多田質店

中で着替えを行うもの、少なかった。これが、地方から上京した下宿生の場合、衣類等を保管する場所

を必要としていたためである。彼らの場合は、質物の担保価値限度分まで資金を借りることはなかった。

また、流資が発生する際には、利用客の判断に任せる対応を行っていた。多田質店との記載の無い封筒を用

いて流資期限が迫っていることを通知し、質入れ主に流資か利息の支払いによる続続かいずれかを選択させ

20
た。こうした対応は、鳥橋氏の知る限り、他の施設では行われておらず、多田質店に特有の制度であったとのことがある。その結果、質流れとなった品物は、一部の例外を除き、品目ごとに、それぞれ専門の古物商に売却していたという。

次に、多田質店の客層についてみていく。多田質店の利用客は、その多くが近隣地域に居住する人であった。また、他の三田の質屋が庶民的な客層によっていたのに対して、多田質店は比較的裕福な客層が多く、その中でも慶應義塾の学生の利用が特徴的であったという。慶應義塾の学生の顕著な利用があった背景には、慶應義塾に隣接していたという質屋業を営んでいた時期を、多田隆之助は「学生さんを大事にした古い時代だった」という。これにより、学生が質物として多く活用したものには書籍類であった。また、中には自宅の蔵から質物を持ち出され、一定数を占めたという。さらに、慶應戦期の慶應義塾が優勝した際には、学生が自宅の蔵から質物を売り上げ、資金を借りていく学生が多かった。これは、当時は学資がなければ登校できなかったことから、結果として、慶應義塾の学生の利用が減ったため、多田質店側では、帳簿に記載することなく、学生に資金を融通していたといえる。同様の例として、某部が優勝祝賀会を銀座で開くための資金に窮乏した際には、優勝旗を質物として資金を借り入れたこともあった。

先に言ったように、一九三〇年代後半以降の多田質店の貸付口数は、減少の一途をたどっている（図1）。
これは、多田隆之助氏によって、「先代の遺言でね、万一手放すようなことになっただけの被告、飲食店を廃業し、飲食店へと転業する。」

三色アイスやシロップ水（水、ブリン、お汁粉などを提供していた）。この飲食店は、多田隆之助夫の死により廃業し、その後は、書道教室を開くなどしたが、一九七二年に土地及び建物を慶應義塾に売却した。

高橋氏からのオーラル・ヒストリーにより明らかになった事実は加治屋・前掲論文及び重田・三科・前掲論文による帳簿資料の分析結果、さらに、本稿第二節までの検討を裏付ける内容であるといえよう。即ち、多田質店が、利用者の状況に対応した柔軟な対応を行っていたことが、経営者側の視点から確認できたことである。流質規律が厳密に適用することなく、事前に利用客に確認を行うなど、従来の研究史の中では明らかにされてなかった実態が確認できた。また、従来その可能性が指摘されていた質屋の倉庫利用に関しても、実際に行われていたことが確認できた。したがって、質屋の営業活動の領域に制限されない活動を行っていたことは、多田質店が利用客の生活を重視した営業方針を採っていたことの証左であろう。
おわりに

以上、本稿では、多田質店を事例として、庶民金融の学生利用の実態を検討するとともに、多田質店経営者の側のオーラル・ヒストリーに基づく分析を行った。その結果として明らかになった点は、以下の三つに要約されよう。第一に、多田質店は、取引期間が長期化する利用客に対して、資質払期限を定めて四ヶ月以上にする柔軟な対応を行っていた。第二に、利用客の長期化に亘る恒常的な利用は、彼らが質屋から手元流動性の高い資金を調達していたことを意味していた。第三に、多田質店の側でも、利用者の利用客を提供すべき、質屋の業務範囲を超えた対応を行っていた。こうした柔軟な対応は、決済、前掲書などに代表されるようなこと、までの研究の中でも議論が及ぶことがなかったが、質屋金融の実態を示している。

では、こうした事例は、近代日本の金融史の中で、どのように位置づけられるのであろうか。当該時期に高利貸しを除けば、一般的に個人を対象とした金融機関は整備されていなかった。即ち、現代におけるサラリーマン金融やクレジットカードの様に、簡便に資金を調達する手段は存在しなかったといえる。そうした中で、本稿で取り上げた具体的な質入れ行動の留意すると、質屋が人格的関係に基づき、手元流動性の提供を担っていたといえる。勿論、その利用動機は、個々人により大きく異なるものである。そのため、さらなる事例研究により、質屋金融とその利用客の実態を明らかにすることが、今後の課題として望まれる。
近代日本の都市庶民金融

約人名簿、K一六〇二四二一四五三
人名簿、K一六〇二四二一五四
当該期間のK・Iの職業は不明である。

太田屋多田賃店資料 賃物台帳
第十六号 大正十三年
K一六〇二四二一五四

当該期間のK・Iの職業は不明である。

当該期間のK・Iの職業は不明である。

７月四日に受渡されていることから、利息発生期間を見越して計算し
た。

太田屋多田賃店資料 賃物台帳
第十七号 昭和十年
K一六〇二四二三五

質屋に対するオーラル・ヒストリーの研究成果としては、名取ならびに
小浜ふみ子『賃屋の社会史』、愛知大学経営総合科学研究

究所、二〇〇〇年が挙げられる。

江戸のなごや、三田の質蔵』取りこわし、『東京新聞』、昭和九年
K一六〇二四二三五に時と、明治三〇年代の従業員は四人から五人であっ
た。

一般に、家財簿書などを資金需要の切迫によると、保管が為に質入れする場合
には、質置主がヘク借入金ヲ

少額ヲ利息ヲ付ノヘンカテヲ還スルトされてるもの（日本銀行調査局編集発行
前掲書、二五頁）。

同前。